

① 申請者	北海道小樽市、室蘭市、夕張市、岩見沢市、◎美唄市、芦別市、江別市、赤平市、三笠市、歌志内市、栗山町、月形町、沼田町、安平町	② タイプ	地域型 / シリアル型 A B C D E
③ タイトル			
(ふりがな)	ほんぼうこくさくをほっかいどうにみよ！～きたのさんぎょうかくめい「たんてつこう」～		
本邦国策を北海道に観よ！～北の産業革命「炭鉄港」～			
④ ストーリーの概要（200字程度）			
<p>明治の初めに命名された広大無辺の大地「北海道」。その美しくも厳しい自然の中で、「石炭」・「鉄鋼」・「港湾」とそれらを繋ぐ「鉄道」を舞台に繰り広げられた北の産業革命「炭鉄港」は、北海道の発展に大きく貢献してきました。</p> <p>当時の繁栄の足跡は、空知の炭鉱遺産、室蘭の工場景観、小樽の港湾そして各地の鉄道施設など、見る者を圧倒する本物の産業景観として今でも数多く残っています。</p> <p>100 km圏内に位置するこの3地域を原動力として、北海道の人口は約100年で100倍になりました。その急成長と衰退、そして新たなチャレンジを描くダイナミックな物語は、これまでにない北海道の新しい魅力として、訪れる人に深い感慨と新たな価値観をもたらします。</p>			
炭鉱(住友奔別炭鉱立坑槽)	鉄鋼(室蘭工場夜景)	港湾(小樽港北防波堤)	
⑤ 担当者連絡先			
担当者氏名			
電 話		FAX	
E-mail			
住 所			





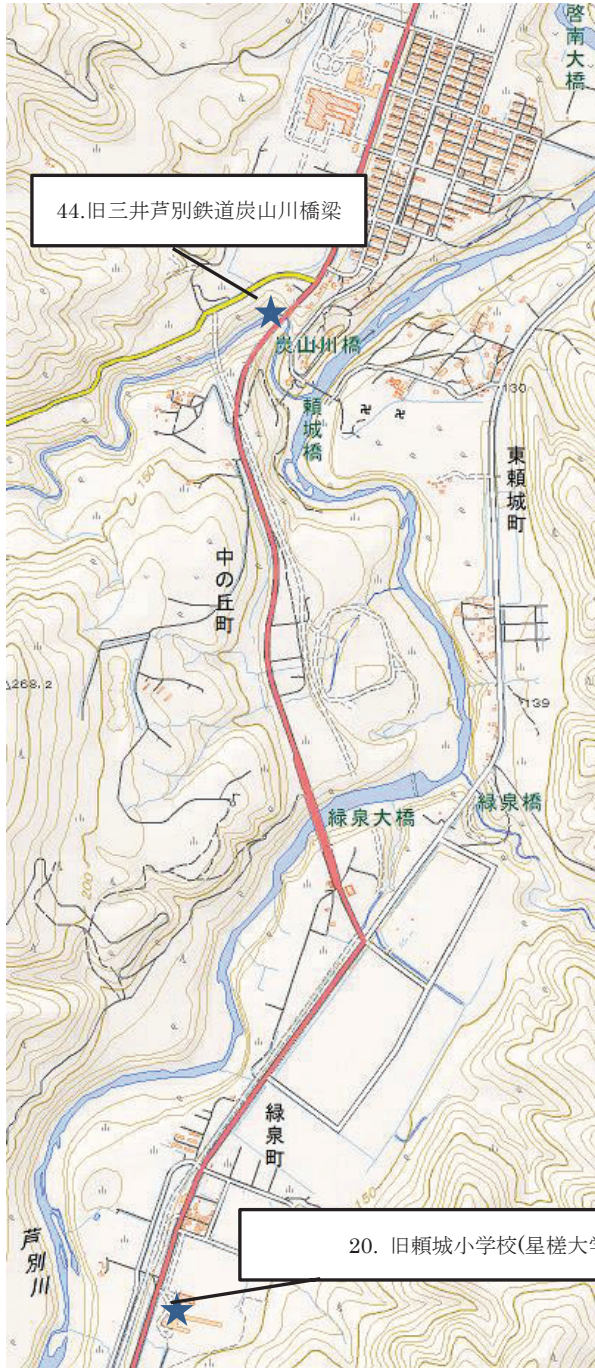
A 沼田町



B 赤平市



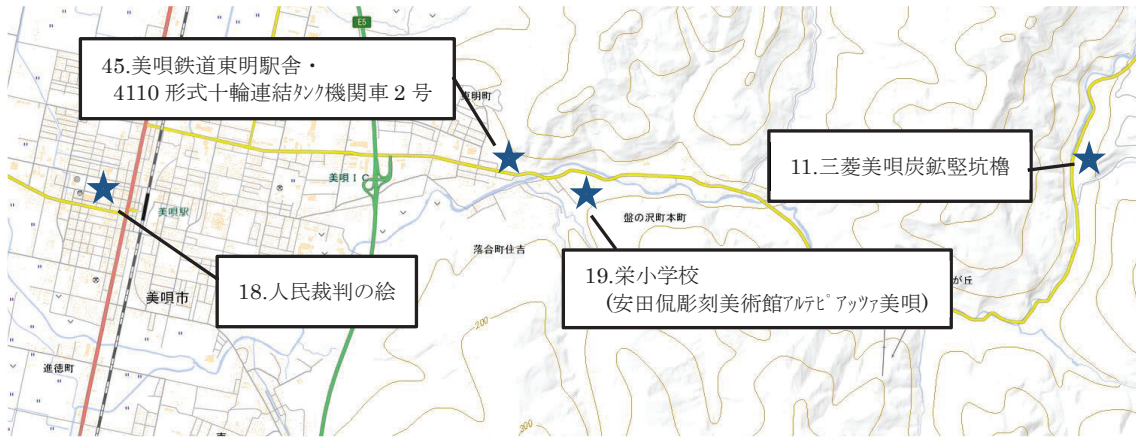
C 芦別市



D 夕張市



E 美唄市



F 三笠市



G 月形町



H 岩見沢市



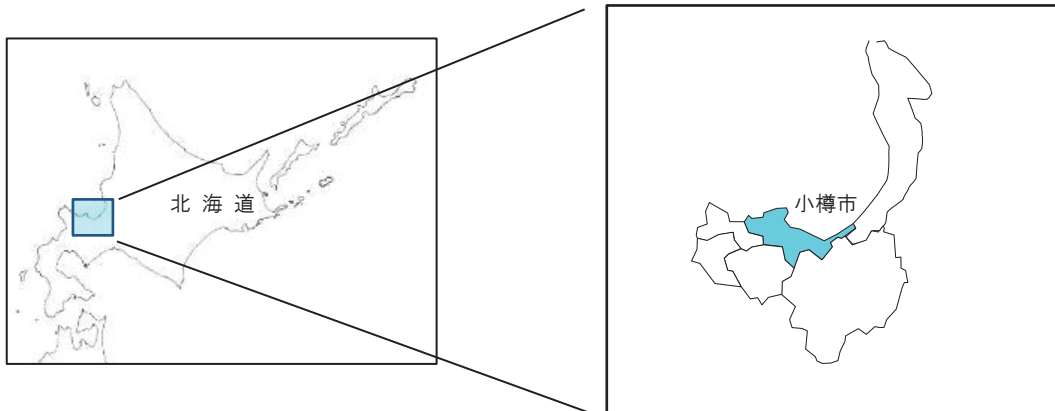
I 栗山町



J 歌志内市



### 市町村の位置図 (小樽市)

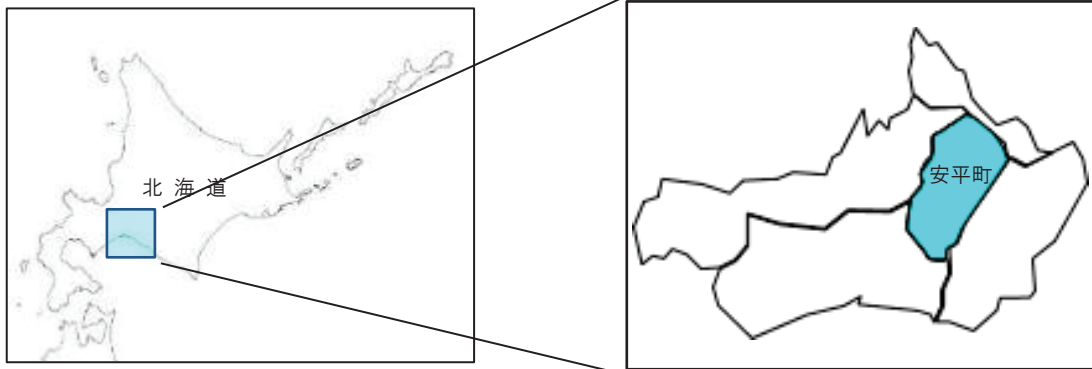


### 構成文化財の位置図 (小樽市)

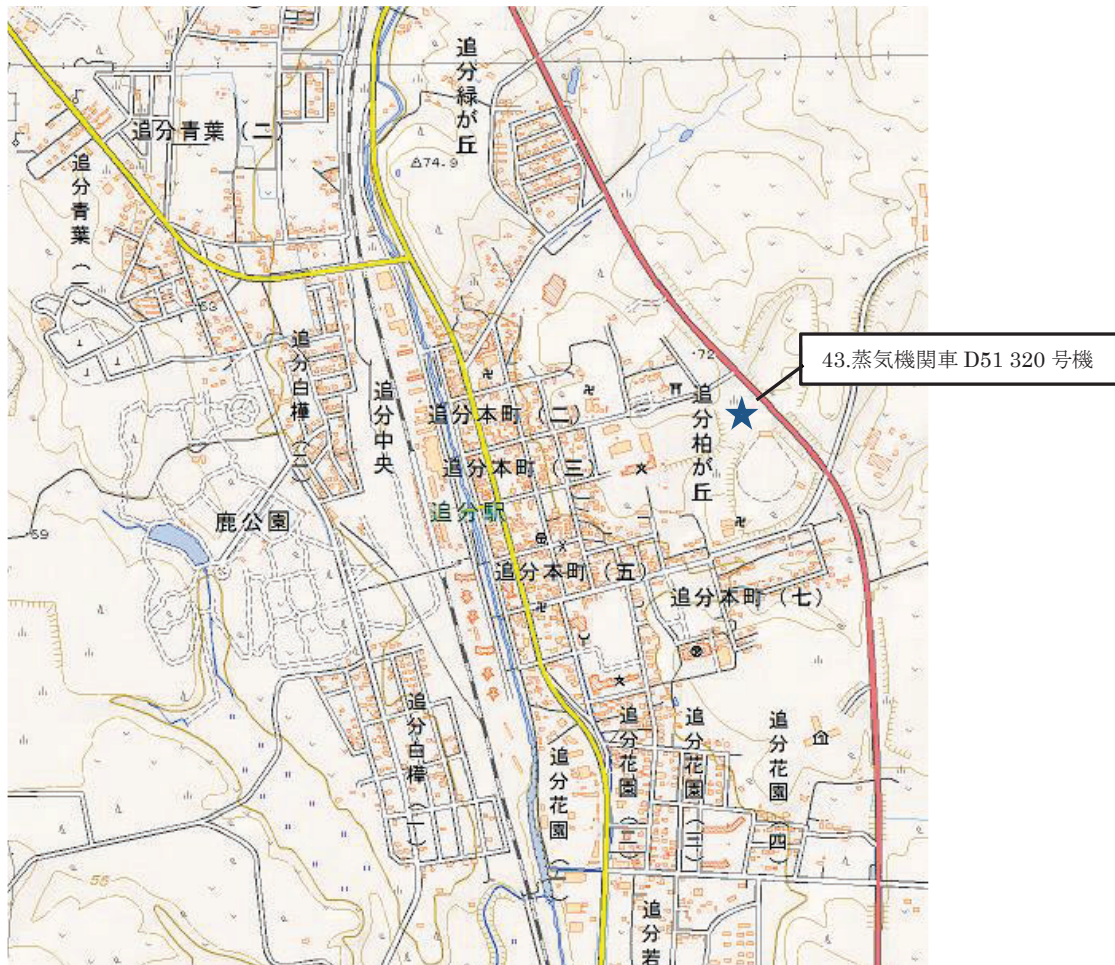




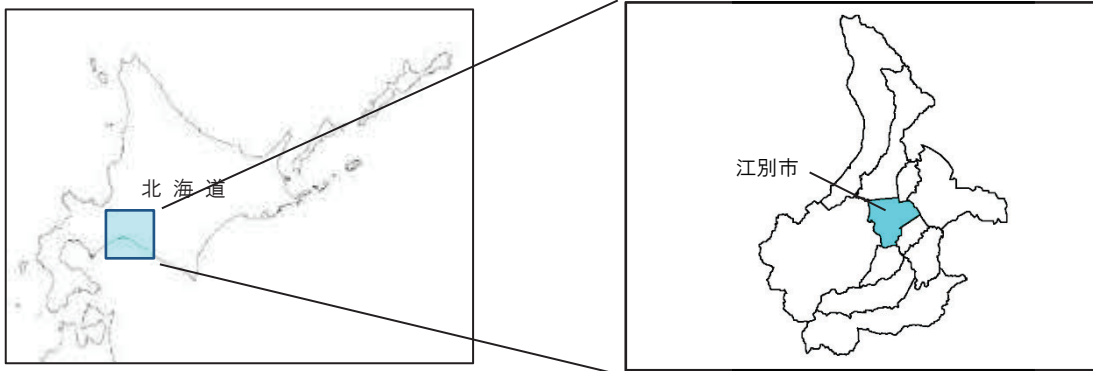
### 市町村の位置図 (安平町)



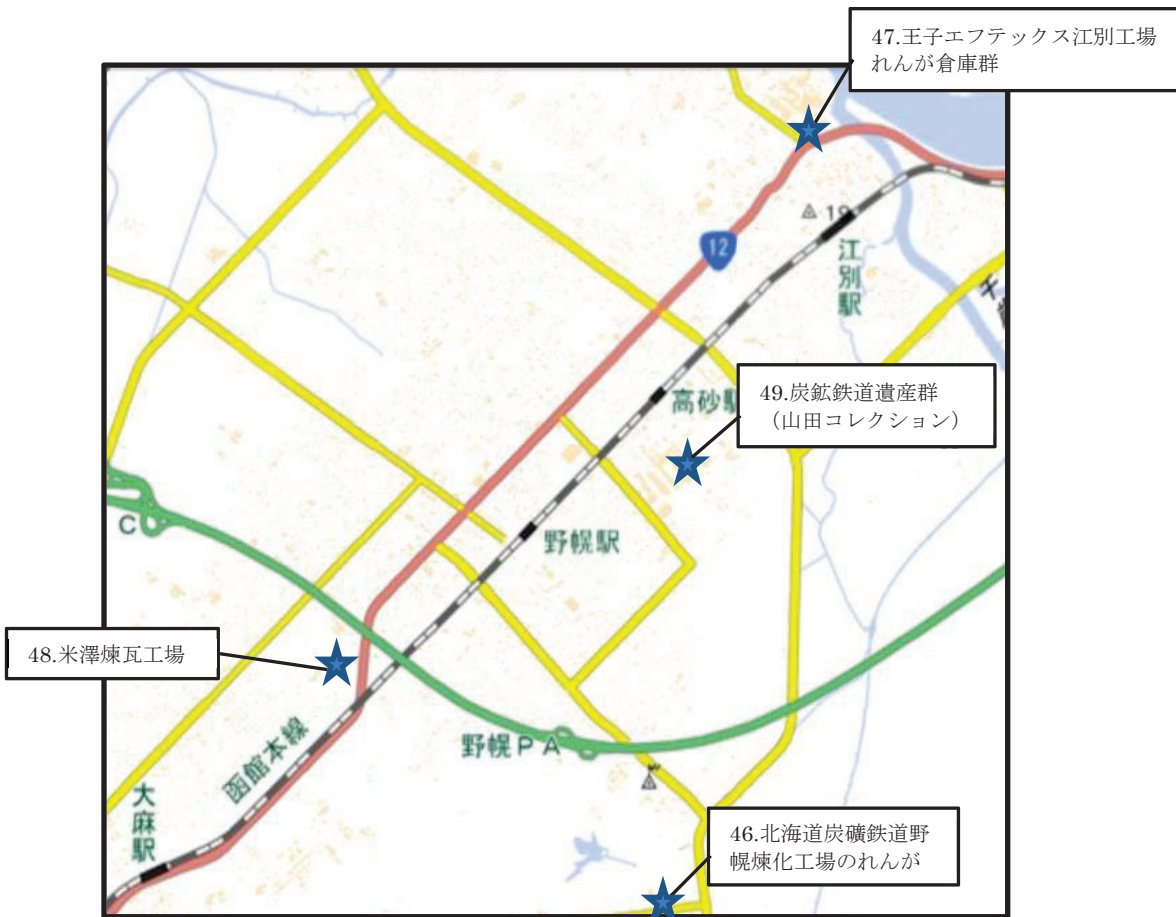
### 構成文化財の位置図 (安平町)



### 市町村の位置図 (江別市)



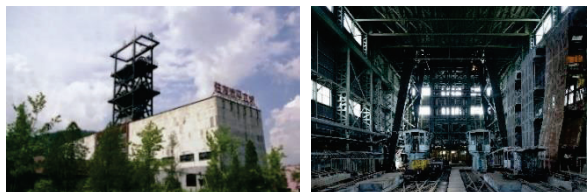
### 構成文化財の位置図 (江別市)



## ストーリー

## ■炭鉄港との出会いー石炭、鉄鋼、港湾、鉄道ー

札幌から北東に向けて車で1時間、空知地方をドライブしていると、街並みの中に異彩を放つ、高さ44mの巨大な鉄塔が見えてきます。これは平成6年に閉山した住友赤平炭鉱の立坑櫓で、東京スカイツリーよりも深い地下650mから石炭を揚げていた操業当時の雰囲気、そのままに残す圧倒的な存在感と機能美、そして元炭鉱マンのガイドが見学者を魅了します。



住友赤平炭鉱立坑櫓とその内部

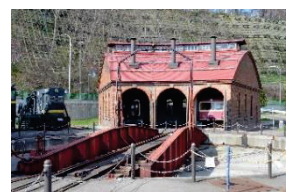
空知の石炭を基軸に、室蘭の鉄鋼、小樽の港湾、これらを繋ぐ炭鉄鉄道によって繰り広げられた近代化の物語「炭鉄港」。世界遺産〈明治日本の産業革命遺産〉と同じ源流を持ちながら、開拓から製鉄までわずか30年という短期間で独自の発展を遂げた「北の産業革命」であり、その歴史をひも解くと、これまで気づけなかった北海道の新たな魅力が目の前に広がります。

## ■北海道の開拓ー炭鉄港のはじまりー

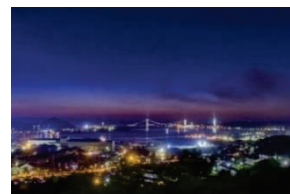
年間約800万人もの観光客が訪れる【小樽】。観光客に人気の高い「運河」や「古いまちなみ」を語るには「近代」のストーリーが欠かせません。

北海道は、明治になって、資源開発と北方警備の観点から国策として開拓が進められました。そのため、国家財政が約2千万円/年のところ、5年で1千万円という開拓計画が立てられ、西洋の技術も積極的に導入されました。

その象徴的な存在が、【空知】の炭鉄開発でした。ライマンの調査により、石炭が豊富に埋蔵していることがわかり、明治12年に幌内炭鉱（三笠市）が開鉱、明治15年にはその石炭を運ぶための小樽～幌内間（約90km、当時の日本最長）の鉄道が、クロフォードらによりわずか3年で完成しました。同時に労働力確保のため2つの集治監（監獄）が開かれ、一大国家プロジェクトとして《炭鉄港》の物語はスタートしたのです。



石炭を運ぶ機関車を格納した機関車庫三号



港と工場が織りなす室蘭の夜景

炭鉄と鉄道は、後に北海道炭礦鉄道会社（北炭）に払い下げられ、【室蘭】への鉄道延伸が進められたことで、室蘭は石炭積出港として取扱量が急激に増え、北海道三番目の特別輸出港に指定されました。その後、鉄道は再国有化され、北炭は売却資金をもとに、空知の石炭を使った鉄鋼業に進出、室蘭は鉄のまちへと変貌していきます。

## ■富国強兵と領土拡大ー炭鉄港の発展ー

【小樽】は、明治30年代には、我が国初の本格的港湾として北防波堤の整備が進むなど、北海道随一の港町となっていました。第1次世界大戦での世界的な農産物の高騰を背景に、北海道産品の輸出港として更なる発展を遂げました。小樽から道内各地へ鉄道網が伸びたことから、産品を容易に入手できたためです。

また、第1次世界大戦は、【空知】の炭鉄にも大きな変化をもたらしました。採掘現場が次第に深くなり生産量も拡大する中、欧州製機器の輸入が困難となったため、国産技術による電化や機械化が進んだのです。立坑が続々と掘削され、新鉱開発が活発化するなど、技術革新の時代を迎えました。

【室蘭】の製鉄は、生産・経営とも初めは順調に行きませんでした。昭和9年の日本製鉄への合併を機に一転、大增産体制へと向かいました。

三都それぞれの産業と技術の下支えとなったのが、江別のれんが産業でした。明治31年に北炭がれんが工場を設置し、以降もれんが工場の進出が相次いだ江別は、一躍れんがの町として栄え、北海道近代化の重要拠点となりました。

### ■戦後復興とエネルギー革命－炭鉄港の活躍と衰退－

第2次世界大戦後、昭和40年代からいち早く衰退の兆しが現れたのも【小樽】でした。輸入原材料の調達に不利な日本海側にあったため、太平洋側にある苫小牧港との競争に破れ、商業・金融機能も次々と札幌へと移転していきました。

一方、【空知】【室蘭】は、戦後復興のため炭鉱と鉄鋼業に優先して資源が投入され大活躍しました。戦争被害が比較的軽微で、豊富な石炭を持つ北海道が戦後日本の再出発に不可欠だったのです。しかし、昭和30年代後半には状況が一変、エネルギー革命により石油が急激に普及し石炭に取って代わります。

【空知】では、「スクラップ=ビルド政策」に沿った大規模投資により操業を効率化、生産コストを削減し、生き残りへの最後の懸命な努力が重ねられます。しかし、大勢に抗うことはできず多くの炭鉱が閉山。史上最大の産業転換政策である「石炭政策」によって、5万人の労働者が空知を去りました。

【室蘭】も、小樽と同様に苫小牧港に物流機能が移るとともに、国内臨海部の新鋭製鉄所の出現により次第に地位を低下させます。日本が高度成長へとまい進する中で、《炭鉄港》は国策による使命を完全に終えたのです。



技術開発により進化する立坑

### ■未来に向けた「知の旅」－炭鉄港のこれから－

その後、地域の歴史を見つめ直し、新たな価値を見出すまちづくりが、再び【小樽】から始まりました。歴史遺産を生かした「歴史とロマンの街 小樽」として、多くの観光客が訪れています。また、【空知】や【室蘭】でも地域の歴史や産業遺産を生かしたまちづくりが進んでいます。

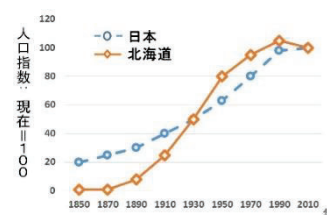


労働者に愛された酒蔵とスタミナ源の室蘭やきとり

さらに《炭鉄港》は、世界遺産〈明治日本の産業革命遺産〉の出発点である薩摩を源流とする点でもユニークです。薩摩藩主・島津斉彬は、日本初の西洋式工場群「集成館事業」を推進し西欧からの脅威に対抗しましたが、ロシアによる北方の脅威にも危機感を抱き、軍事力に加え産業が必要と考え、その思いが家臣団に引き継がれます。そのため北海道開拓では多くの薩摩出身者が要職を占め、ビール醸造（現・サッポロビール）や屯田兵、米国技術者招聘など、新たな技術・制度が積極的に導入されました。

《炭鉄港》エリアには、当時を物語る多くの産業遺産が残されているほか、「なんこ」や「室蘭やきとり」をはじめとした独特の食文化が生まれ、今なお地元の方々に愛されています。

成長と衰退、そして新たなまちづくりに向かうという《炭鉄港》のドラマチックな変化を実感することは、日本が直面する人口減少・少子高齢化の先取りとして、未来に向けたヒントと新たな価値観に出会うことができる、「知の旅」なのです。



急増した北海道の人口状況

ストーリーの構成文化財一覧表

番号	ふりがな 文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
<b>炭 鉱</b>				
①	そらちがわるとうたんそう 空知川露頭炭層	未指定 (地質鉱物)	1857年に松浦武四郎が発見、その後榎本武揚や開拓使に雇われた地質学者ライマンらが調査をし、空知で初めての炭層が確認された。	赤平市
②	ほくたんほろないたんこうおとわこう 北炭幌内炭鉱音羽坑	未指定 (建造物)	1879年、幌内炭鉱で最初に開削された延長約700mの坑道。北海道近代炭鉱の端緒となった。	三笠市
③	かぼとしゅうじかんほんちようしゃ 樺戸集治監本庁舎 つきがたかぼとほくぶつかん (月形樺戸博物館) そらちしゅうじかん 空知集治監 てんごくかんしや 典獄官舎 えんとつ レンガ煙突	市町有形 (建造物)	樺戸集治監は1881年、空知集治監は1882年に設置され、受刑者は開拓のため道路開削や炭鉱労働に従事した。	月形町 三笠市
④	ゆうばり せきたんだいろとう 夕張の石炭大露頭 「ゆうばり しやくそう」 夕張24尺層	道天然記念物 (地質鉱物)	1888年に、道庁技師・坂市太郎によって発見された。厚さ約7.3mと大規模で貴重なものであるとともに、夕張の歴史の起点である。	夕張市
⑤	こばやししゅうぞうけんぞうぶつぐん 小林酒造建造物群	国登録有形 (建造物)	1897年栗山町に移転。周辺の炭鉱労働者に愛され出荷数を伸ばした。敷地内にはレンガや軟石による蔵が点在し、町の景観を形成している。	栗山町
⑥	きゅうほくたんゆうばりたんこう 旧北炭夕張炭鉱 てんりゅうこう 天龍坑	国登録有形 (建造物)	1900年に開坑。入気・排気の坑口が対になって残っていること、赤レンガの化粧坑口が意匠的に美しいことが特徴である。	夕張市
⑦	やま きおく 炭鉱の記憶マネジ メントセンター いしくら 石蔵	未指定 (建造物)	1909年に建築された石蔵で、鉄道で繁栄した時代の面影を今も残している。2009年から「炭鉱の記憶」の情報拠点として運営。	岩見沢市
⑧	ほくたんしか たにくらぶ 旧北炭鹿ノ谷倶楽部 ゆうばりろくめいかん (夕張鹿鳴館)	国登録有形 (建造物)	1913年開設。北炭の賓客や会社幹部の宿泊・会合に用いられた福利施設で、1954年に昭和天皇が宿泊した際に、寝室・炊事場を大改造した。	夕張市
⑨	ほろないへんでんしよ 幌内変電所	未指定 (建造物)	1919年に建設された。夕張～歌志内間約100kmの自家発送電線網の中間に位置し、長距離送電黎明期の数少ない施設として貴重である。	三笠市
⑩	ほくたんいくしゅんべつたんこう 北炭幾春別炭鉱 にしきたてこうやぐら 錦立坑 檣	未指定 (建造物)	1919年に掘削。立坑深度214m、立坑檣高さ約10mで、現存する立坑としては道内最古。電気が動力として使用され始めた頃の立坑。	三笠市

⑪	みつびしびばいたんこう 三菱美唄炭鉱 たてこうやぐら 竪坑櫓	未指定 (建造物)	1923年に建設された、道内で2番目に古い竪坑。排気・入気用の2本の竪坑が並び、現在は炭鉱メモリアル森林公園として公開。	美唄市
⑫	きゅうほくたんだきのうえ 旧北炭滝ノ上 すいりょくはつでんじょ 水力発電所	未指定 (建造物)	1925年に運転開始。北炭が所有する炭鉱の動力源として建設され、発電された電気は100km離れた歌志内まで送られた。	夕張市
⑬	ほくたんしんほろないこうこうぐち 北炭新幌内砒坑口	未指定 (建造物)	3度のガス爆発事故に遭いながら1934年に出炭開始。坑内メタンガス利用の先駆け的な存在であった。	三笠市
⑭	きゅうほくたんゆうばりたんこう 旧北炭夕張炭鉱 もぎこうどう 模擬坑道 ゆうばりしせきたんはくぶつかん (夕張市石炭博物館)	国登録有形 (建造物)	天龍坑の補助坑道を一部利用して1939年に見学用坑道として整備。地下で実物の炭層や採炭機械を見学できる国内でも珍しい施設。	夕張市
⑮	きゅうほくたんしみずさわ 旧北炭清水沢 すいりょくはつでんじょ 水力発電所	未指定 (建造物)	滝ノ上水力発電所と同様、炭鉱の動力源として建設され1940年に運転開始。	夕張市
⑯	ほくたんあかまたんこう 北炭赤間炭鉱 ズリ山	未指定 (文化的景観)	採掘した石炭を選別した残滓であるズリを積み上げた山。赤平市のランドマークになっており、ズリ山階段数(直線部分777段)は日本一。	赤平市
⑰	さいたんききゅうこくこうふ 採炭救国坑夫の像	市有形 (美術工芸品)	1944年に制作されたコンクリート製の塑像(高さ3.63m)。炭都・夕張のシンボルとして市民に親しまれ、戦時美術品としても価値がある。	夕張市
⑱	じんみんさいばん 人民裁判の絵	市有形 (美術工芸品)	人民裁判は、戦後労働運動の象徴的な事件として知られ、労働条件の向上を求める労組が、会館で幹部職員を36時間にわたって拘束した大衆団交の様子を伝える。	美唄市
⑲	きゅうさかえしょうがっこう 旧栄小学校 やすだかんちょうこくびじゅつかん (安田侃彫刻美術館 びばい アルテピ・アツァ美唄)	市有形 (建造物)	1950年に炭鉱町で開校。1959年には30学級・1,250名となりピークを迎えた。現在は彫刻家安田侃氏の作品を展示する美術館として活用。	美唄市
⑳	きゅうらいじょうしょうがっこう 旧頼城小学校 (星槎大学) こうしやおよ 校舎及び体育館	国登録有形 (建造物)	1954年建設。校舎は36教室、一線校舎の全長106mと長大な外壁総れんが積、体育館は屋根を支える木骨トラスの幾何学的形状が特徴的。	芦別市
㉑	みかさしやくしよちようしゃ 三笠市役所庁舎	未指定 (建造物)	1956年竣工。Y字型の形状は、当時話題となった東京厚生病院と酷似しており、市制施行を目前にした産炭都市の勢いを感じさせる。	三笠市
㉒	すみともぼんべつたんこう 住友奔別炭鉱 たてこうやぐら 立坑櫓・周辺施設	未指定 (建造物)	1960年建設。ドイツの技術を導入し、合理化の旗手として注目されたが、わずか12年で閉山。	三笠市
㉓	すみともあかびらんこう 住友赤平炭鉱 たてこうやぐら 立坑櫓・周辺施設	未指定 (建造物)	1963年建設。住友奔別の改良型。1日2回、ガイド付きで建屋内部を見学できる貴重な施設で、石炭産業のスケールを体感できる。	赤平市

④6	北海道炭礦鉄道 野幌煉化工場のれんが	未指定 (歴史資料)	北炭が 1898 年に設置した野幌煉化工場で製造され、日本製鋼所旧火力発電所や旧北海道炭礦鉄道岩見沢工場に使われた野幌れんが。	江別市
④7	王子エフテックス 江別工場 れんが 倉庫群	未指定 (建造物)	1909 年に野幌れんがで建築された市内最古の倉庫をはじめ、れんが倉庫が立ち並ぶ。前身の富士製紙の進出は江別の近代化に大きく寄与し、石炭運搬用の専用線も敷かれた。	江別市
④8	米澤煉瓦工場	未指定 (建造物)	1939 年に設立され、操業中のれんが工場では道内最古。工場のシンボルである煙突は、石炭焚き時代から現在まで使われており、基部を間近に見学可能。	江別市
⑤0	旧上歌会館 (悲別ロマン座)	未指定 (建造物)	渡邊洋治による 1953 年の建築。住友上歌志内炭鉱の職員厚生施設（映画館兼集会場）で、炭鉱の全盛期には一流歌手のショーや芸能演劇、多くの映画上映で賑わった。	歌志内市
<b>鉄 鋼</b>				
②4	旧火力発電所 (日本製鋼所)	未指定 (建造物)	1909 年に建設された煉瓦造の火力発電施設。鉄鋼生産に必要な電力を自社発電するため、英国から輸入した発電機などが格納されていた。	室蘭市
②5	恵比寿・大黒天像	未指定 (美術工芸品)	1909 年に室蘭で初めて製造された鉄を用いて制作された。高炉の火入れを記念して関係者に贈呈されたもの。	室蘭市
②6	瑞泉閣	未指定 (建造物)	1911 年に建設された宿泊・接待のための施設。大正天皇が皇太子時代に、日本製鋼所室蘭製作所を視察の際、宿泊所として建設された。	室蘭市
②7	日本製鋼所室蘭 製作所製造 複葉機 エンジン「室 0 号」	市有形 (美術工芸品)	1918 年に日本製鋼所が製作した日本最初の航空機エンジン。陸軍からの正式受注を受け、わが国初の制式航空発動機として完成した。	室蘭市
②8	工場景観と企業 城下町のまちなみ	未指定 (文化的景観)	港の周囲の工場群は、夜景観賞の人気スポットとなっている。また製鉄所付近には、最盛期の面影を残す商店街や施設などが残っている。	室蘭市
<b>港 湾</b>				
②9	小樽港北防波堤	未指定 (建造物)	1908 年、広井勇によりわが国初の本格的港湾整備として建設。100 年以上を経過した現在も、「第一線防波堤」としてその機能を果たしている。	小樽市
③0	北炭ローダー基礎	未指定 (建造物)	1939 年建設。鉄道で運んだ石炭を船に積み込むための機械が据え付けられていた基礎、小樽港に唯一現存する石炭積み出しの痕跡。	小樽市

③①	いろないぎんこうがい 色内銀行街 (旧 三井物産及び旧 三井物産小樽支店)	未指定 (建造物)	日本銀行、三井銀行をはじめとする明治から昭和にかけて建設された大手銀行が建ち並び、石炭を扱った商社の支店が当時の栄華を今に伝えている。	小樽市
③②	きゅうみつびしごうしが 旧 三菱合資会社 室蘭出張所	未指定 (建造物)	1914年に建築。戦時中は日本石炭(石炭各社を統合した統制販売会社)の事務所として使用。現在は市民出資による保存団体が所有。	室蘭市
③③	きゅうほくたんむろらんかいいん 旧 北炭室蘭海員 倶楽部	未指定 (建造物)	1926年に建築された北炭の海員倶楽部。山荘風の意匠が特徴。北炭の専務取締役であった井上角五郎氏の別荘があった場所に建設された。	室蘭市
<b>鉄 道</b>				
③④	てみやせんあとおよ 手宮線跡及び 附属施設	未指定 (史跡)	手宮線は、1880年に北海道最初の鉄道として開通。市内中心部には、鉄道施設を残したオープンスペースが整備されている。	小樽市
③⑤	きゅうてみやてつどうしせつ 旧 手宮鉄道施設	国重文 (建造物)	機関車庫三号は、1885年竣工の現存するわが国最古の機関車庫。レンガは「フランス」積み。機関車庫一号は1908年に竣工。レンガは「イギリス」積み。	小樽市
③⑥	おたるちゅうおういちば 小樽中央市場	未指定 (建造物)	市場で仕入れた鮮魚やかまぼこをブリキ缶に入れ風呂敷で背負った行商人、通称ガンガン部隊が鉄道を使い空知の産炭地へ向かっていた。	小樽市
③⑦	きゅうほっかいどうたんこうてつどう 旧 北海道炭礦鉄道 岩見沢工場 (岩見沢レールセンター)	未指定 (建造物)	1899年、手宮工場の分工場として設置。車両の組み立てや機械の製作修理にあたり、現在もJR北海道が使用している。	岩見沢市
③⑧	むろらんしきゅうむろらんえきしゃ 室蘭市旧室蘭駅舎	国登録有形 (建造物)	1912年に建設。明治の洋風建築の面影を残す屋根や白壁づくりの外観、外回りは入母屋風で「がんぎ」と呼ばれるアーケド様式になっている。	室蘭市
③⑨	あさひえきしゃ 朝日駅舎	未指定 (建造物)	1919年に開駅。万字炭鉱、美流渡炭鉱、朝日炭鉱から石炭を運搬するために開設された万字線の当時の様子を今に伝える。	岩見沢市
④⑩	いわみざわそうしやじょうあと 岩見沢操車場跡	未指定 (史跡)	1922年に建設が始まった貨車操車場で、1926年には5線群からなる操車場が完成。石炭輸送の中継地として発展した岩見沢の面影が残る。	岩見沢市
④⑪	とうまつえきしゃ 唐松駅舎	未指定 (建造物)	1929年に住友唐松炭鉱の石炭搬出物駅として開駅。待合室と駅事務室の腰折屋根2棟が直交した独特な形態が特徴的である。	三笠市
④⑫	クラウド 15号 蒸気機関車	町有形 (美術工芸品)	1889年ドイツ・クラウド社で製造された蒸気機関車。九州鉄道に輸入され、1931年に留萌鉄道に譲渡。1967年まで昭和炭鉱で稼働した。	沼田町

④③	蒸気機関車 D51 320号機	町有形 (美術工芸品)	1939年に製造され小樽築港・追分機関区等に所属、1976年まで石炭輸送等に当たった。現在も元機関士達による手入れが続けられている。	安平町
④④	旧三井芦別鉄道 炭山川橋梁	国登録有形 (建造物)	1945年に竣工した、三井鉱山専用鉄道の橋梁。鉄橋上にはディーゼル機関車と石炭専用貨車が展示され、当時の運搬の様子を伝えている。	芦別市
④⑤	美唄鉄道東明駅舎 4110形式十輪連結 タンク機関車2号	未指定(建造物) 市有形 (建造物)	1948年に開業した美唄鉄道の駅舎。機関車は1919年に製造。駅内には当時の広告や時刻表など石炭で栄えた町の記憶が残っている。	美唄市
④⑨	炭鉱鉄道遺産群 (山田コレクション)	未指定 (美術工芸品)	北炭夕張鉄道、三菱美唄鉄道、三菱大夕張鉄道など、炭鉱の鉄道で使われた希少な蒸気機関車や貨車などのほか、それらの鉄道関連物品が保存されている。現在は民間団体が保存。	江別市

(※1) 文化財の名称には振り仮名を付けること。

(※2) 指定・未指定の別、文化財の分類を記載すること(例: 国史跡、国重文(工芸品)、県史跡、県有形、市無形、未指定(建造物)、等)。なお、**未指定であっても文化財保護の体系に基づいた分類を記載**すること。

(※3) 各構成文化財について、ストーリーとの関連を簡潔に記載すること(単に文化財の説明にならないように注意すること)。

(※4) ストーリーのタイプがシリアル型の場合のみ、市町村名を記載すること(複数の都道府県にまたがる場合は都道府県名もあわせて記載すること)。

## 構成文化財の写真一覧

①空知川露頭炭層（地表に露出する石炭層）



②北炭幌内炭鉱音羽坑



③樺戸集治監本庁舎



空知集治監典獄官舎レンガ煙突



④夕張の石炭大露頭「夕張 24 尺層」



⑤小林酒造建造物群



⑥旧北炭夕張炭鉱天龍坑



⑦炭鉱の記憶マネジメントセンター



⑧旧北炭鹿ノ谷倶楽部 (夕張鹿鳴館)



⑨幌内変電所



⑩北炭幾春別炭鉱錦立坑櫓



⑪三菱美唄炭鉱堅坑櫓



⑫旧北炭滝ノ上水力発電所



⑬北炭新幌内砒坑口



⑭旧北炭夕張炭鉱模擬坑道



⑮旧北炭清水沢水力発電所



⑯北炭赤間炭鉱ズリ山（頂上からの展望）



⑰採炭救国坑夫の像



⑱人民裁判の絵



⑲旧栄小学校 (安田侃彫刻美術館アルピ°アツツァ美唄)



⑳旧頼城小学校 (星槎大学) 校舎及び体育館



㉑三笠市役所庁舎



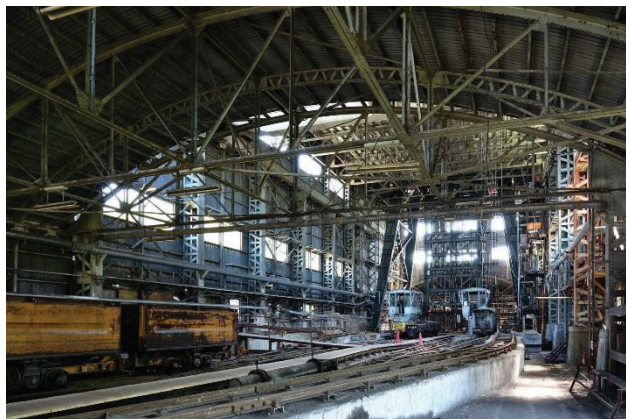
㉒住友奔別炭鉱立坑櫓・周辺施設



②③ 住友赤平炭鉱立坑櫓・周辺施設



閉山当時のまま残された立坑櫓内部



④⑥ 北海道炭礦鉄道野幌煉化工場のれんが



④⑦ 王子エフテックス江別工場 れんが倉庫群



④⑧ 米澤煉瓦工場



⑤⑩ 旧上歌会館 (悲別ロマン座)



②④旧火力発電所（日本製鋼所）



②⑤恵比寿・大黒天像



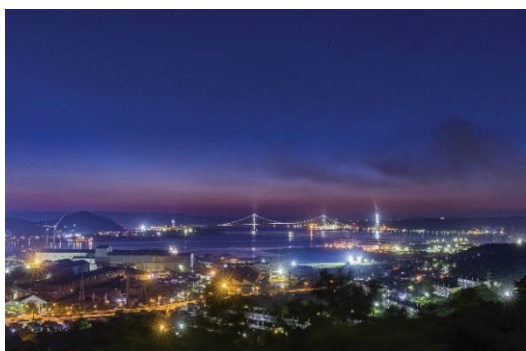
②⑥瑞泉閣



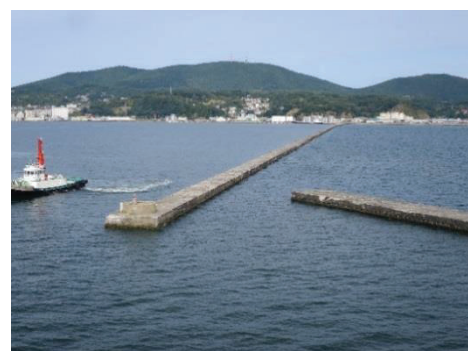
②⑦日本製鋼所室蘭製作所製造  
複葉機エンジン「室0号」



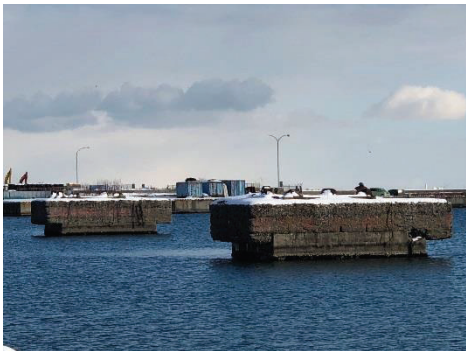
②⑧工場景観と企業城下町のまちなみ（夜景）



②⑨小樽港北防波堤



⑩北炭ローダー基礎



⑪色内銀行街 (旧三井物産小樽支店)



⑫旧三菱合資会社室蘭出張所



⑬旧北炭室蘭海員倶楽部



⑭手宮線跡及び附属施設



⑮旧手宮鉄道施設 (機関車庫三号)



③⑥小樽中央市場



③⑦旧北海道炭礦鉄道岩見沢工場



③⑧室蘭市旧室蘭駅舎



③⑨朝日駅舎



④⑩岩見沢操車場跡



④⑪唐松駅舎



④② クラウス 15 号蒸気機関車



④③ 蒸気機関車 D51 320 号機



④④ 旧三井芦別鉄道炭山川橋梁



④⑤ 美唄鉄道東明駅舎、4110 形式十輪連結タンク機関車 2 号



④炭鉱鉄道遺産群 (山田コレクション)



## 日本遺産を通じた地域活性化計画

認定番号	日本遺産のタイトル
68	本邦国策を北海道に観よ！～北の産業革命「炭鉄港」～

## (1) 将来像 (ビジョン)

## 「炭鉄港」を北海道の次の100年に向けた礎に ～“担い手”の力で地域の記憶を北海道の新たな魅力へ～

北海道は、明治初期から昭和の高度成長期までの100年で、人口が100倍となる急成長を遂げた。薩摩藩の島津斉彬が構想した「北門の鎖鑰」、開拓使が主導した「殖産興業」、日露戦争による「新たな領土」、太平洋戦争の「国家総動員」、その後の「経済復興」と、「炭鉄港」の歴史は、時々の国の政策に沿って日本が近代国家として自立・発展する過程を一身に体現している。

その中核となったのは石炭というエネルギーであり、そこから派生する鉄鋼・港湾・鉄道を含めて、歴史をたどるための手掛かりは100km内外の範囲に多数存在している。これまでの100年にわたり日本で最も忠実に「近代」を実践してきた足跡を顧みることが、今後100年の北海道・日本を考える上で極めて意義深いものといえる。

このような価値を持つ北海道空知、小樽、室蘭を中心とする歴史のストーリーが「本邦国策を北海道に観よ！～北の産業革命「炭鉄港」～」として2019年に日本遺産に認定された。以降、炭鉄港推進協議会を中心に、炭鉄港エリアの振興局、市町、NPO、民間事業者等により、ストーリーや構成文化財を発信する非常に多岐にわたる取組が行われてきた。

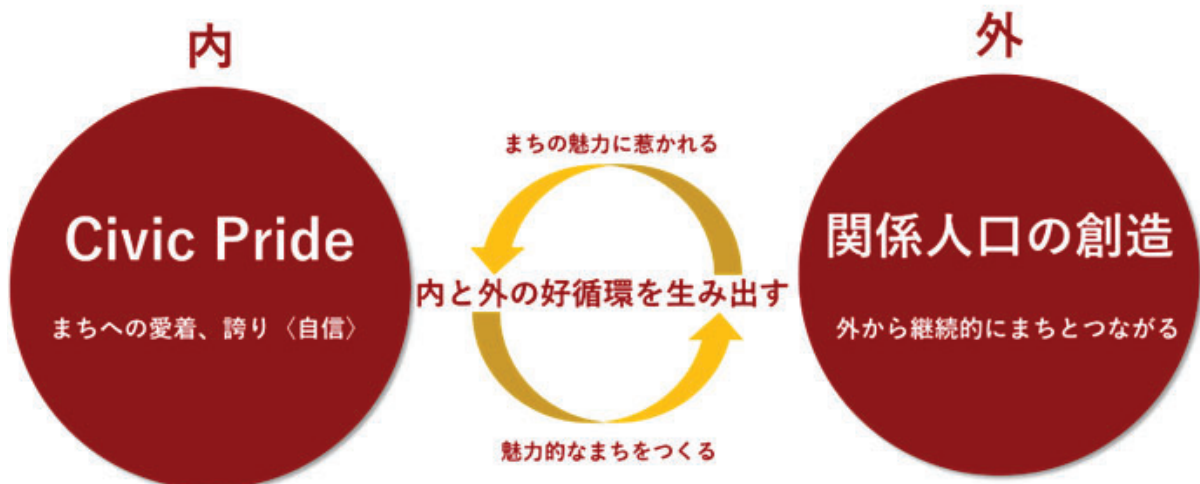
その取組の成果として、「炭鉄港」という言葉も徐々に浸透してきており、大手企業等と連携した様々な事業も生まれてきているが、「産業遺産」という分野の特性ともいえる保存活用の難しさ（いわゆる廃墟状態となっている施設の保存への住民理解、安全性の担保による構成文化財の公開の難しさ、現地への交通手段の確保等）もあり、さらなる取組を進めていく上での課題となっている。

これらの課題も踏まえた上で、炭鉄港のストーリーを活かした観光や地域が歩んできた歴史に誇りを持てるような教育の推進、新たなエネルギーや地質研究の拠点化など、炭鉄港を「ここにしかない」価値ととらえ、少子高齢化・人口減少・産業の疲弊・交通などの地域課題が北海道の中でも先行して進行する炭鉄港地域の活性化に向けた取組を続け、道内の他の地域における地域創生・まちづくりの一つの指針とするとともに、北海道の次の100年に向けた礎とする。

### 【将来像の実現に向けたポイント】

日本遺産認定以降、炭鉄港推進協議会をはじめ市町、市民団体等を中心に様々な取組が行われてきたが、今後さらに炭鉄港を活かした地域活性化が持続可能なものにしていくためには、それぞれの取組を継続するだけでなく、その質をさらに高めながら発展させていく必要がある。

その際に大切なのが、地域の「内（シビックプライドの醸成）」と「外（関係・交流人口の創造）」の意識を常に持ちながら取組を行うことである。これまで各地域で続けられてきたまち歩きプログラムやツアー、教育現場での子どもたちの学び、市民のまちづくり講座、これらによりややもすると負の「遺産」と捉えられることも多かった炭鉄港の遺産の価値が再評価され、ポジティブな「資産」と捉えられ、地域への誇り（シビックプライド）の醸成につながりつつある。とくに地域やまちの子どもたちに炭鉄港のストーリーを伝えることは大切であり、自分が育ったまちへの愛着、この地域が日本の経済を支えていたという誇りは、いつかまちを支える原動力になる。



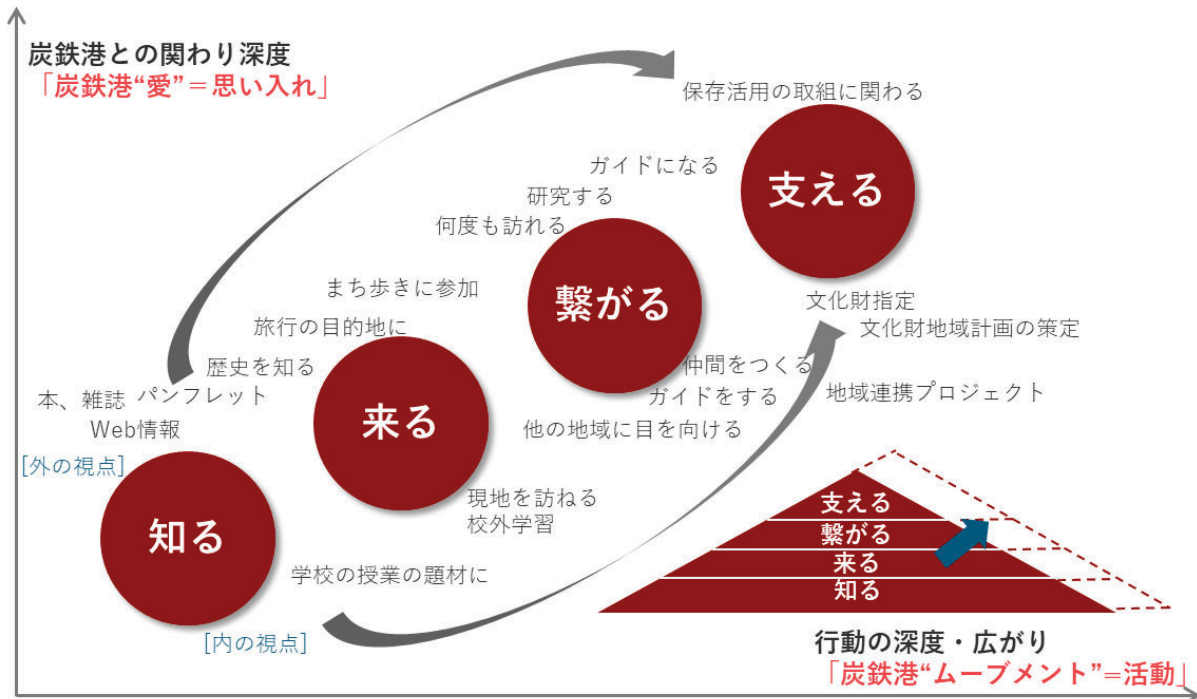
また、1995（平成7）年の最後の閉山（歌志内・空知炭鉱）から約30年が経過し、当時を知る人が少なくなっていく中、どのように炭鉄港の歴史・物語を伝え、地域活性化につなげていくか。

解決に向けた目指すべき方向性について、考え方の核となるのが「炭鉄港に関わる人＝“担い手”」をいかに増やしていくかということである。担い手といっても様々な段階がある。「知る→来る→繋がる→支える」、このような各段階に応じた取組を進めていくことで、一番重要な「人」づくりを通じて担い手の輪を拡げ、徐々に炭鉄港の「記憶」を北海道の新たな魅力として次世代に伝えていくことが必要である。

以前に炭鉱遺産を活用したまち歩きが行われた際に、炭鉱が稼働していた頃のまちの思い出を参加者に向けて話すことを求められた女性がいた。当初はとて皆さんに話すなんて、と遠慮していた女性が実際に話し始めていると当時のまちの様子や自分たちの暮らし

を非常に魅力的に語り始めた。地域遺産を活用した地域活性化とは、地域経済につなげていく取組みももちろん必要だが、一方でこうした地域に暮らす人たちが「生き生きとする瞬間」を一つ一つ作っていく積み重ねが地域の元気につながる大切な要素と考える。

＜“担い手”の力で地域の記憶を北海道の新たな魅力へ＞



【「炭鉄港」の価値の再整理】

ここで、炭鉄港の価値とは何かについて改めて整理し、炭鉄港を活かした持続可能な地域活性化に向けたより具体的な取組を考えるにあたっての視点を示す。「価値」という言葉を二つの側面から考えてみたい。一つは“保存する”意味としての価値で、歴史的価値と言い換えることもできる。これは、例えば「炭鉄港は北海道の産業化の証として価値がある」というように、炭鉄港の「大切さ」を示すものである。もう一つは“活用する”有用性としての価値で、社会的・経済的価値と言い換えることもできる。これは、たとえば「観光資源として価値がある」というように、炭鉄港を「活かす」可能性を示すものである。

I “保存する”意味としての価値【炭鉄港の「大切さ」】

これまでの炭鉄港は、「北の産業革命」の証として保存する意味を説明してきた。これは、わずか100年の間に、狭い地理的な範囲で、資源の産出から加工までの一貫した流れが形成され、それが北海道ひいては日本の近代化に貢献したというストーリーであった。このストーリーは、炭鉄港の国家的かつマクロな視野からみた価値を示すものであるが、そこには含まれてこなかった地域のストーリーも存在する。

①炭鉄港×〇〇＝地域のオリジナルなサブストーリー：

関連文化財（現在の炭鉄港の構成文化財には含まれないものの各地域にとって大切な歴史・文化）や、他の日本遺産（北前船・心臓と呼ばれたまち）、ジオパーク（三笠）

などと掛け合わせることで地域ごとのオリジナルなサブストーリーを見出す。

②炭鉄港が生み出した生活文化：

食文化に加え、炭住での生活、地域の女性たちの連帯など、これまで炭鉄港のストーリーのなかで語られることがやや少なかった要素に光を当てる。

③地形・地質という観点から見た炭鉄港：

北海道の大地の成り立ちという自然環境的な観点から語ることでできる価値を見出す。→「世界から研究者を呼べる」（木村学東大名誉教授）

④現在や未来を照射するために向き合う意味：

過去に目を背けるのではなく、現場労働者の苦難や事故の歴史なども総体的に学ぶことで、我々がこれからの地域のあり方を考えるための基盤とする。



炭鉄港のさらなる価値に基づくサブストーリー

## II “活用する” ときの有用性としての価値【炭鉄港を「活かす」可能性】

炭鉄港を“活用する”有用性としての価値については、各地における文化遺産の保存活用の取り組みを参考にしつつ整理すると、「地域アイデンティティの源」「教育資源」「観光資源」「地域ブランド」「交流資源」などが考えられる。そして、それぞれ順に、炭鉄港をきっかけに住民が地域を改めて知る、子どもたちが社会を知る、関係人口の創出、商品開発やプロモーション、グローバルなつながりを生み出す基盤になるものと整理できる。

- ①地域アイデンティティを育む源としての有用性→住民が地域を改めて知る基盤になる。
- ②教育資源としての有用性→子どもたちが社会を知るための基盤になる。
- ③観光資源としての有用性→関係人口の創出の基盤になる。
- ④地域ブランドとしての有用性→商品開発やプロモーションの基盤になる。
- ⑤交流資源としての有用性→グローバルなつながりを生み出す基盤になる。

活用の面から考える炭鉄港の有用性

以上をふまえて、今後の炭鉄港を活かした具体的な取組を行っていく際には以下の「歴史的な視点」「教育的な視点」「地域振興の視点」「グローバルな視点」の四つの視点を持って進めていくことが大切である。

### 歴史的な視点

- 遺産は過去のものではなく、未来を考える糧。
- 世界でも稀有な人口減少を経験した地域。  
→未来への示唆の強さ = 「すでに起きた未来」がここにある。
- 地域社会の人々の生業や生活を掘り起こし、過去の営為に光を当て直すことができる。

### 教育的な視点

- 生まれ育った地域に、日本や世界レベルの遺産になるほどの歴史があること知ることができる。
- 知ることにより、郷土を誇りに思い愛する心を醸成する→若者の“まちづくりの原点”になる。
- いわゆる負の歴史の学びから、人権、労働、グローバルな歴史についての認識の基盤を得る。

### 地域振興の視点

- 「今あるモノで今ないコトをつくる」“そこにしかない”もので新たな産業（とくに観光）の創出につながる期待がある。
- 知的満足度を求める旅行スタイルが今後徐々に広がっていく中、炭鉄港は格好のテーマになる。
- 炭鉄港は地域ブランドの基礎にもなりうる。

### グローバルな視点

- 炭鉱は「グローバルな共通言語」（中澤秀雄上智大学教授、産炭地研究会代表）
- 炭鉱をはじめとする産業の歴史、加えて地質学的な関心を通して、グローバルな次元で新しいつながりを創出できる。  
例）博物館同士の交流、研修旅行

## 炭鉄港のさらなる活用に向けた四つの視点

(2) 地域活性化計画における目標

目標①：地域住民や国内外からの来訪者が日本遺産のストーリーに触れ、その魅力を体験すること

指標①-A：炭鉄港関連地域におけるまち歩き等体験プログラムへの参加人数

年度	実績			目標		
	2022	2023	2024	2025	2026	2027
数値	305 人	564 人	820 人	1,000 人	1,100 人	1,200 人
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	構成市町、関連団体等で行われる炭鉄港体験ツアー・プログラム等への参加人数					

目標②：地域において日本遺産のストーリーが誇りに思われること

指標②-A：地域の文化に誇りを感じる住民の割合

年度	実績			目標		
	2022	2023	2024	2025	2026	2027
数値	91%	93%	92%	95%	95%	95%
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	協議会構成市町における地域の文化に誇りを感じる住民の割合。目標値は95%以上の維持を目指す。					

目標③：日本遺産を活用した事業により、経済効果が生じること

指標③-A：協議会構成市町における観光入込客数

年度	実績			目標		
	2022	2023	2024	2025	2026	2027
数値	10,530 千人	14,565 千人	集計中	15,632 千人	16,195 千人	16,778 千人
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	目標値は2023年度基準とし、前回の地域活性化計画に引き続き、対前年度比伸び率3.6%増を目標として設定					

目標④：日本遺産のストーリー・構成文化財の持続的な保存・活用が行われること

指標④-A：公開活用されている（入場や見学等ができる）構成文化財の割合

年度	実績			目標		
	2022	2023	2024	2025	2026	2027
数値	81%	81%	81%	83%	85%	85%
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	構成文化財の状況を詳細に把握し、所有者等との連携を取りながら、特別公開日を設けるなどして構成文化財の価値を体感できる機会を可能な限り増やしていく。					

目標⑤：地域への経済効果も含め広く波及効果が生じること						
指標⑤－A：炭鉄港地域の外国人延べ宿泊者数						
年度	実績			目標		
	2022	2023	2024	2025	2026	2027
数値	91,650 人	303,827 人	集計中	349,154 人	374,293 人	401,242 人
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	炭鉄港地域における外国人延べ宿泊者数を集計。コロナ前の2019年における北海道全体の対前年比伸び率 7.2%を基準とし、毎年7.2%増を目標とする。					

### (3) 地域活性化のための取組の概要

## 炭鉄港の価値の具現化に向けた取組の“深化”

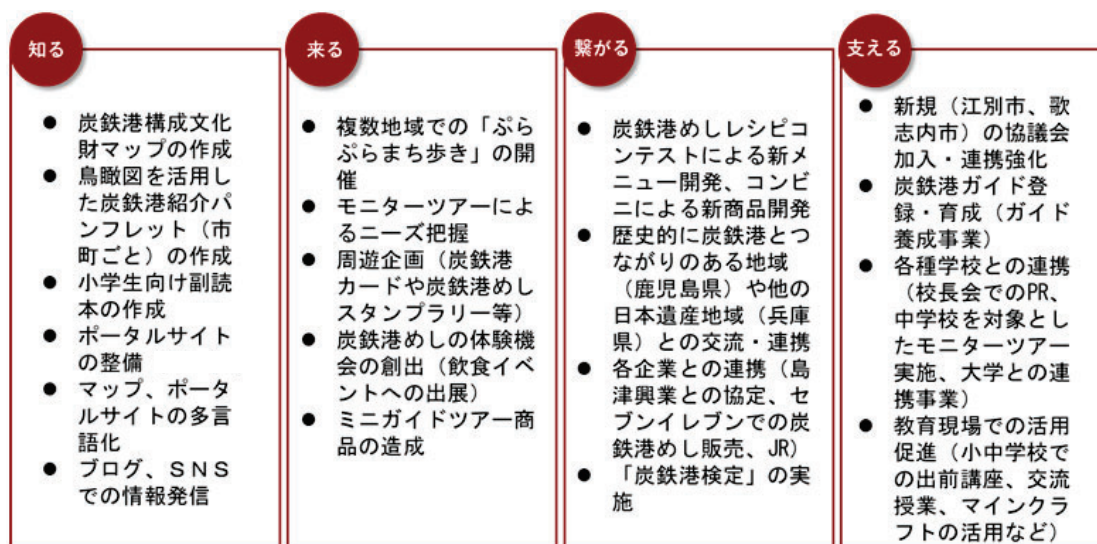
～「今あるモノで今ないコトをつくる」取組の質を高め、持続可能な地域活性化へ～

### <これまでの取組>

炭鉄港の2019年の日本遺産認定以降、炭鉄港推進協議会を中心に、炭鉄港エリアの振興局、市町、NPO、民間事業者等により、日本遺産申請時に定めた地域活性化計画における取組の視点(4本の柱)をもとに、非常に多岐にわたる取組が行われてきた。

#### 第一次地域活性化計画(2018年度)で定めた取組の視点(4本の柱)←

- 【知る】 情報発信を進めるとともに、すでに起きた未来として、学び・生かす機会を創る←
- 【来る】 訪れた方が、遺産を体験する環境整備や、地域との交流機会を拡大する←
- 【繋がる】 炭鉄港に関わり続けられる仕組みを構築し、訪れた方の次の行動を促す←
- 【支える】 官民連携を強化しながら、多様な世代が関心を持ち、参加する体制を構築←



#### 日本認定(2019)以降の炭鉄港を活かした主な取組

認定直後のコロナ禍により、各地への誘客ツアーや人が集まるフォーラムなどの開催は難しい時期が続いたが、個人を対象とした周遊促進企画(炭鉄港カード、スタンプラリー等)や情報発信・普及啓発事業(ウェブサイト、各種パンフレットの作成、インバウンド向け情報整備、炭鉄港デジタル資料館等)を中心に行ってきた。

人の移動制限が緩和されて以降は、各地でのまち歩き事業や教育旅行なども実施が可能になり、NPO法人炭鉱の記憶推進事業団が各地域で実施する「ぶらぶらまち歩き」は2024年度にはこれまでで最多の約700人が参加し、この企画のために本州から来訪する参加者も増えている。また、三笠市では同市で推進しているジオパークの取組と連動した教育旅行プログラムを開発し、非常に人気となっており、道内外から多くの学校、子どもたちの見学が増えているほか、観光協会のDMO登録も進めており、新たな旅行商品や特産品開発などを展開していく予定となっている。認定当時からDMOであった小樽市観光協会、岩見

沢観光協会のほか、美唄市でも DMO が立ち上がり、今後の炭鉄港関連の旅行商品の開発・販売に向けた機運が高まっている。炭鉄港推進協議会でも炭鉄港ガイド養成事業を実施、ガイド付きミニツアーを各地で開催するなど、誘客促進に向けた各種取組が進められている。

また、炭鉄港×食をテーマにした「炭鉄港めし」はパンフレットの制作を始め、炭鉄港めしを味わうプレミアムツアーの開催、(株)セブン-イレブン・ジャパンの協力による道内コンビニでの炭鉄港めし(おにぎり、麺、鍋など)の発売や、炭鉄港めしを切り口とした小学生向け出張授業の開催、地域の飲食店やレンタカー会社とも連携した「炭鉄港めしスタンプラリー」なども実施され、地域経済への波及効果が出てきているほか、食という幅広い層に受け入れられやすいテーマから、炭鉄港への興味を広げる取組みとなっている。

さらに、情報発信の分野でも 2023 年度に全日本空輸(株)の協力により、ANA の公式サイトで「日本遺産炭鉄港 つながるストーリー」と題した特集ページが公開、YouTube チャンネル、メールマガジン等で全国的な情報発信が行われた。また、JR 北海道の企画である、鉄道を利用して現地に赴き、駅周辺のウォーキング・まち歩きを楽しむ「JR ヘルシーウォーキング」に炭鉄港の各地域のコースが継続して組み込まれている。2024 年春にオープンした無印良品岩見沢店には「炭鉄港コーナー」が設置されたほか、岩見沢市内の構成文化財「朝日駅舎」のそばに旧朝日炭鉱の歴史を紹介する看板が道内企業により整備されるなど、様々な民間企業との連携も着実に進んできている。

幅広い世代の参画に向けた取組として、2024 年度には多様な専門性を持つ道内 4 つの大学と連携を開始し、大学生が実際に炭鉄港の各地域を訪ね、各地の遺産を活かしたアイデアとして動画制作や旅行プランの作成のほか、ゲーム「マインクラフト」を使った企画等が発案され現在も取組を継続している。また、地域内の小学生向けの副読本の制作や学校や市民向けの出前講座なども実施し、各地域で住民が地元の遺産を知り、シビックプライドを育むための取組も継続して実施されている。

このように、様々な主体により炭鉄港を活用した幅広い取組が行われてきているが、今後さらに各地域での炭鉄港のストーリーを活かした地域活性化を進めていくためにはこれまでの取組をさらに“深化”(=より質を高め、良いものにしていくこと)が必要である。第 1 次地域活性化計画の 4 つの軸をベースに、(1)将来像の項目で整理した活用に向けた新たな視点も留意しながら、今後とくに力を入れていくべき取組を下記のとおりまとめた。

## ＜今後の取組＞

### ① 炭鉄港情報のゲートウェイ整備【知る】【来る】

日本遺産認定後の情報発信、広報等により「炭鉄港」の名前は知られてきているが、炭鉄港が地域、北海道、日本にとって果たしてきた価値を改めてわかりやすく伝える。また、炭鉄港の魅力や楽しみ方を発信していくため、炭鉄港ポータルサイトをはじめとして窓口となる情報を充実していくほか、拠点施設での情報発信機能を強化する。

### ② 地域の歴史を伝えるストーリー（サブストーリー）のさらなる掘り起こしと活用【知る】【繋がる】

炭鉱の閉山から年数が経過し、鉄路も縮小されており、“記憶”が“歴史”になっていく中で、当時のことを知る地域の人たちの記憶をしっかりと記録し、炭鉄港の魅力伝えるストーリー（サブストーリー）を掘り起こしていく。その際「労働の記憶」だけではなく「生活の記憶」も掘り起こしていくことで、これまでどちらかという男性中心だったものを全ての人の記憶に広げ、より広範なストーリーの発掘につなげる。そうして掘り起こしたサブストーリーを情報発信や観光・教育に活かしていく。例えば、サブストーリーの活用により、見学が難しい構成文化財が多い地域等で、まち歩きプログラムを実施することも可能となる。これまでも各地域の生活文化にフォーカスを当てた取組は行われてきたがこれを強化していくことが望まれる。こうした取組を通じて、炭鉄港が「どこか遠い歴史の話」ではなく「自分の足元につながるストーリー」であることを地道に伝えていき、より身近な“自分ごと”と感じてもらえるようにしていく。

### ③ 「今に繋がる」強みを活かした発信【知る】【繋がる】【支える】

炭鉄港ストーリーは、昭和の高度成長期まで続いたことから、炭鉄港に関連する産業等の従事者やその周辺で生活していた方を家族や親戚、知り合いに持つ人が、今なお地域に数多く存在する。この「今に繋がる」強みを活かし、潜在的に地域に存在する「まちの歴史や地域振興に関心があり、担い手として期待できる層」との接点を積極的に生み出していく。

そのための情報発信の切り口として、自分のルーツ（家族や親戚など）と炭鉄港の繋がりをテーマにする（キーワード例「わたしと炭鉄港」）、住む場所や故郷と炭鉄港の繋がりをテーマにする（キーワード例「あなたのまちの物語」）、日常生活との繋がりに注目し文化・景観・食（炭鉄港めし）・言葉などにどのように歴史が影響しているかをテーマにするといった方法が考えられる。

また、「〇〇から△周年」などメモリアルイヤーに関する情報を共有し、積極的に周知の機会としていく。

併せて、遺産を通して過去ではなく未来を見るための勉強会・ワークショップ開催、すでに活動している担い手の支援・紹介、アートプロジェクトの継続などを通じて将来の担い手となりうる人々との繋がりを作っていく。

### ④ 観光等を通じた交流人口の拡大【知る】【来る】【繋がる】【支える】

「炭鉄港めし」をはじめとする食や土産品開発、体験等地域への波及効果を意識したイ

ベント（まち歩き）等の継続的実践・拡充を進める。また、情報の窓口、ゲートウェイとなる各地の博物館、郷土資料館等での炭鉄港に関わる情報提供について、室蘭市などすでに行われている地域もあるが、さらに整備を進める。炭鉄港地域間での連携も強化し、各道の駅や博物館などで他の炭鉄港地域の土産品を買えるようにする他、ガイドが他の地域の炭鉄港のことも紹介できる体制を作っていく。

また、新たな取組として炭鉄港の構成市町には含まれないが、人口197万人を抱える札幌市内での情報発信を進めることで、そこから各炭鉄港地域への誘客につなげる（北海道庁赤れんが庁舎、旧永山武四郎邸（道指定文化財、三菱の道内炭鉱開発の拠点となった歴史的建造物）等を想定）。

これまでも各地域や旅行事業者による炭鉄港のストーリーを活かした旅行商品・体験プログラムづくりが行われてきているが、炭鉄港と親和性の高いアドベンチャートラベルやリジェネラティブ・ツーリズムの考え方も踏まえ、「炭鉄港×〇〇」を意識し、例えば将来的なインバウンド招聘も見据えた自転車ツアーの実施や、地域の飲食店やお土産店等への波及効果の高い商品づくりを進め、各地域への誘客を図る。

現在の課題として安全性の問題等により内部見学が難しい構成文化財もあるが、VR等の技術活用、また、「オープンモニュメントデイ（期間を限定して一斉公開を行う企画）」の設定や「プレミアムツアー（安全に配慮し見学を可能にする特別なツアー）」の実施等を通じてこうした通常立ち入り・見学等ができない場所の情報提供や観光面での活用を推進していく。こうした取組は、地域の内と外を繋げるだけでなく、地域同士を繋げる効果を持ち、先述した”点から線・面へ”の展開の一助となる。

また、炭鉄港の構成文化財には公共交通でのアクセスが難しいところも多いが、交通関連事業者（JR等）との連携により炭鉄港関連地域へのアクセス拡充やイベント等の実施等を通じ、より多くの人に各地の炭鉄港構成文化財を訪れてもらう機会を創出していく。

#### ⑤ 炭鉄港の魅力を伝える・活かす人材育成【来る】【支える】

2019年の日本遺産認定以降、ガイド養成講座等を通じて各地でガイド人材の養成が行われてきたが、ガイドができる人材は今後も増えていくことが望まれる。また、今後のアドベンチャートラベル（体験を重視した観光）の普及やサステナブルな観光の実践に向け、よりツアーの質を高めるため、一方的なガイドだけではなくインタープリテーション技術の習得支援等、炭鉄港をより魅力的に伝える人材の育成を進めていく必要がある。

また、主体的に活用を実践、地域の取組のエンジンとなる人材「炭鉄港プロデューサー」の育成、地域で実践的な取り組みを続ける団体・研究者等への活動支援等を通じて、炭鉄港を支える仲間を増やしていくことが大切である。

#### ⑥ 炭鉄港の歴史を次世代に～アーカイブスによる知識の共有・継承【知る】【支える】

各地の古写真を集め、検索可能にした「炭鉄港デジタル資料館」をすでに作成しているが、これまで個人に依存しがちであった次世代への知識や記憶の継承をより一層促進するため、大学等と連携し、高齢化が進む関係者への聞き取り及びその内容の公開等により、誰もが活用できる炭鉄港ストーリーのアーカイブ化を進める。

### ⑦ 文化財等を活かした産業創出等に向けた新たな活用策の検討【来る】【支える】

空知各市町、小樽、室蘭、安平、江別の地域をつなぎ、構成文化財や炭鉄港のストーリーを活かした高付加価値化旅行商品の造成やホテルとの連携などを進め、海外も含めた知的関心の高い「学びの旅」のニーズに対応していく。

併せて、例えば炭鉱遺産での演劇等イベントの開催や学校・企業向けの研修・褒賞旅行など、炭鉄港地域ならではの“そこにしかない”景観を活かしたユニークベニュー等の推進に向けた取組を進めていく。

また、各地域が主体となり、採炭跡地を活用した再エネ事業の研究、CO2 貯留実験等、炭鉱遺産の特徴を活かした新たな産業活性化も視野に入れた取組も検討していく。

### ⑧ 炭鉄港関連地域における教育の発展的充実【知る】【支える】

現在、関係市町村の学校向け教材における炭鉄港に関する記述や、授業で取り上げられる機会などは増えてきているが、座学にとどまらず、現地見学等を含めてさらに地域の子どもたちがより深く炭鉄港・地域の歴史を学ぶことができる教育プログラムを、例えば教員向けのワークショップ等の実施を通じて実践・拡充させていく。

これまでは負のイメージを払拭するために明るい側面に注目した情報発信が多かったが、特に教育においては、負の側面を切り分けることなく全体として炭鉄港のストーリーを伝え理解を深めることを尊重していく。

また、2023 年度には「未来へつながる炭鉄港魅力発掘事業」など大学等との連携事業も行われてきたが、新たに「炭鉄港インターンシップ」等、各地域で実際に現在炭鉄港を活かしたまちづくりに関わる人や企業等とより深く関わることのできる事業を実施していくことで、若者世代の炭鉄港への関心を高めていく。

### ⑨ 取組を推進するためのしくみづくり【繋がる】【支える】

これらの取組推進を支えるために各地域・関係者（炭鉄港地域内・他の日本遺産・ジオパーク等）の横のネットワークを構築、連携強化することでこれまで地域ごとの「点」の取組であったものを「線」さらに「面」の取組にしていく。

また、各地域での未指定の構成文化財の文化財指定・登録、文化財保存活用地域計画策定の検討等を進め、構成文化財の保存を支えるしくみを作っていく。合わせて、炭鉄港の取組を応援してくださる市民、企業等を募る「炭鉄港サポーター」制度、クラウドファンディング、ふるさと納税（すでに炭鉄港に関する特産物、炭鉄港スペシャルガイドツアーを返礼品にする等の導入事例あり）等、市民や企業による支援の枠組みを広げていく。

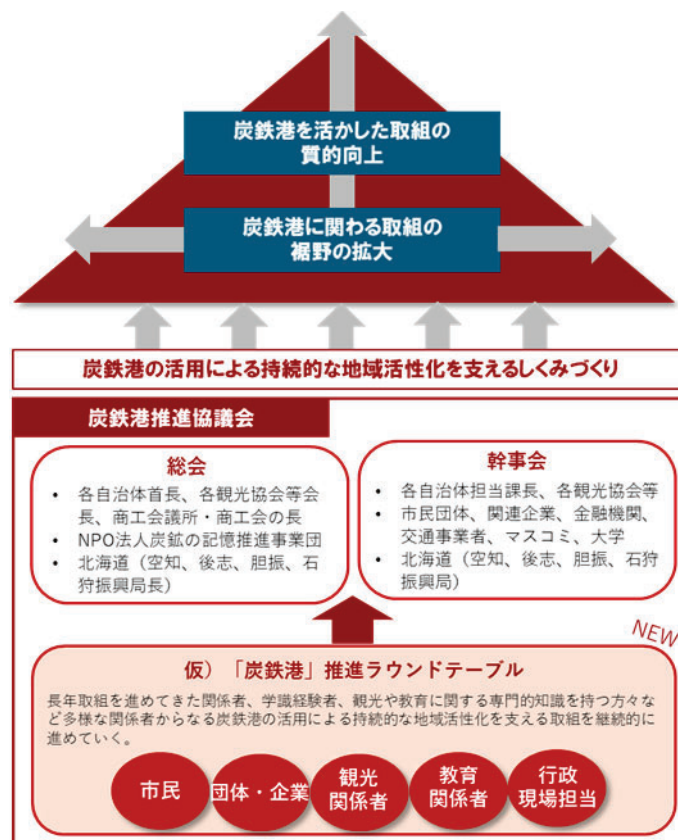
#### (4) 実施体制

### “創発の場”としての「炭鉄港ラウンドテーブル」を新たに設置 ～現場の担当者・専門家らによる実効的な情報・アイデア共有を推進～

2019年の日本遺産認定以降、炭鉄港推進協議会を中心に、自治体、民間団体等により様々な取組が行われてきたが、それぞれがやや「点」の取組になっており、今後炭鉄港を活かした地域活性化を持続的に進めていくためには、炭鉄港に関わるつながりをさらに強化し、取組の質をさらに高めていくこと、炭鉄港に関わる人の裾野を広げていくことが重要である。

炭鉄港推進協議会は発足当初は13の市町であったが、2023年に江別市、2024年に歌志内市が新たに加盟し現在15の市町となった。民間団体も事業者、大学などが発足後に加盟し団体数は増加しており、連携した取組も進められているが、総会・幹事会等の意思決定を行う会議体の他に、より実践的な情報・アイデア共有の場づくりが構成市町をはじめとした関係者等から求められている。

そこで、炭鉄港推進協議会の中に、長年取組を進めてきた関係者、団体・企業、学識経験者、観光（旅行事業者、ガイド等）や教育（教員等）に関する専門家、地域住民、学芸員・研究者、行政担当者（観光関連、学芸員など文化財関連）など多様な関係者からなる「炭鉄港ラウンドテーブル」を新たに設置し、構成市町や市民団体等による継続的・具体的な取組を支えていく体制を構築することで、炭鉄港を活かした取組の裾野の拡大及び質的向上を図る。



「炭鉄港ラウンドテーブル」の取組イメージ

#### [人材育成・確保の方針]

P2[将来像の実現に向けたポイント]の項で示したように、「炭鉄港に関わる人＝“担い手”」を「知る→来る→繋がる→支える」という関わりの段階を意識しながら、各種取組を行っていく。

具体的には、これまでもガイド養成講座等を通じて各地でガイド人材の養成が行われてきたが、引き続き炭鉄港のストーリーを伝えられるガイド養成を進める他、今後のアドベンチャートラベル（体験を重視した観光）の普及やサステナブルな観光の実践に向け、よりツアーの質を高めていくため、一方的なガイドだけではなくインタープリテーション技術の習得支援等、炭鉄港をより魅力的に伝える人材育成を目指す。

また、主体的に活用を実践、地域の取組のエンジンとなる人材「炭鉄港プロデューサー」の育成、地域で実践的な取り組みを続ける団体・研究者等への活動支援等を通じて、炭鉄港を支える仲間を増やしていく。

その他、次世代の担い手育成に向け、現在、関係市町村の学校向け教材における炭鉄港に関する記述や、授業で取り上げられる機会などは増えてきているが、座学にとどまらず、現地見学等を含めてさらに地域の子どもたちがより深く炭鉄港・地域の歴史を学ぶことができる教育プログラムを、例えば教員向けのワークショップ等の実施を通じて実践・拡充させていく。2023年度には「未来へつながる炭鉄港魅力発掘事業」など大学等との連携事業も行われてきたが、新たに「炭鉄港インターンシップ」等、各地域で実際に現在炭鉄港を活かしたまちづくりに関わる人や企業等とより深く関わることができる事業を実施していくことで、若者世代の炭鉄港への関心を高めていく。

## (5) 日本遺産の取組を行う組織の自立・自走

### ① 炭鉄港推進協議会加盟団体の増加

炭鉄港推進協議会は、構成自治体による負担金及び、それ以外の構成団体による協力金により運営している。

2019年度には構成市町は13（夕張市、岩見沢市、美唄市、芦別市、赤平市、三笠市、上砂川町、栗山町、月形町、沼田町、小樽市、室蘭市、安平町）であったが、2023年度に新たに江別市、2024年度に歌志内市が加わった。また、日本鉄道保存協会（事務局は横浜市）等の活動団体、北海学園大学など加盟団体は増加している。さらに他の事業者、市民活動団体、大学等への加盟を呼びかけることで主体的に活動を行う仲間を増やしていく。併せて、新たに増えた構成文化財を活用したプロモーションを展開し、特定分野のファン層の獲得にも力を入れる。その他、加盟団体同士が連携し、炭鉄港各地域の関係商品などの開発・相互販売等に取り組む。

### ② 広域的なまちづくり支援活動を行う団体等との連携強化

シーニックバイウェイ北海道（広域景観保全活動）、北海道遺産協議会（地域遺産を活用したまちづくり支援）など、広域的なまちづくり支援活動を行う団体等との連携をさらに進めていく。すでにシーニックバイウェイのルートに炭鉄港の各市町が入っていたり、北海道遺産の各地域のプロジェクトへの助成制度（イオン北海道（株）が発行する「ほっかいどう遺産 WAON」の年間利用額の一部を地域活動へ助成、令和6年度は22件総額約880万円、炭鉄港関連プロジェクトもこれまで複数採用されている）の活用などが行われているがこうした団体との連携を引き続き進めていく。

### ③ 炭鉄港のストーリーを活かした旅行商品・体験プログラム等の拡大

これまでも各地域や旅行事業者による炭鉄港のストーリーを活かした旅行商品・体験プログラムづくりが行われてきているが、炭鉄港と親和性の高いアドベンチャートラベルやレスポンシブル・ツーリズムの隆盛も踏まえ、「炭鉄港×〇〇」を意識し、例えば将来的なインバウンド招聘も見据えた自転車ツアーの実施や、地域の飲食店やお土産店等への波及効果の高い商品づくりを進め、各地域への継続的な誘客を図る。

### ④ 炭鉄港関連商品開発の拡大（大学等との連携）

日本遺産認定以降、炭鉄港のロゴマークを作成、各地域の事業者によるお菓子、酒、様々なグッズなど関連商品の開発が行われてきているが、例えば、地域の企業がデザイン関連の学部がある大学との連携により学生がデザイン制作に関わるなど、より地域に密着した商品開発等を進め（売上の一部を還元することも想定）ていく他、例えば小樽に関する商品を室蘭や空知地域で販売するなど、相互連携により各地域のPRの役割も果たしていく。

### ⑤ 「炭鉄港サポーター」制度の検討

炭鉄港の取組を応援してくださる市民、企業等を募る「炭鉄港サポーター」制度の創設を検討する。年会費を設定し、サポーターにはきめ細やかな情報発信を行うほか、例

えば、市民には特別な見学会の開催、企業にはロゴマークを使った商品づくりを行って良いなどの特典を設け、より実践的に炭鉄港に関わる機会を創出していく。

## (6) 構成文化財の保存と活用の好循環の創出に向けた取組

### ① 各地域での文化財の調査・研究

各地域の構成文化財を中心に、炭鉄港のストーリーに連なる遺産としてその価値をきちんと後世に伝え、また、構成文化財以外にも各地域の特色ある歴史や生活・文化をサブストーリーとして抽出・整理し、各市町において調査・研究に取り組んでいく他、それを実施する団体等への支援を行う。また、抽出されたサブストーリーの観光等への地域活性化事業への活用も進めていく。

### ② 未指定文化財の指定等

炭鉄港の日本遺産認定以降、例えば美唄市において構成文化財の「人民裁判の絵」「旧栄小学校（安田侃彫刻美術館アルテピアッツァ美唄）」が市文化財へ指定された他、現在、赤平市にある住友赤平炭鉱立坑櫓・周辺施設の重要文化財指定に向けた検討なども行われている。構成市町ごとにこうした未指定の構成文化財の国の文化財への指定・登録や各自治体の文化財への指定に向けた取組を保存に向けた公的な支援を得ていくことも視野に入れて継続的に進めていく。

### ③ 市町における文化財保存活用への取組

文化財指定以外の枠組みとして文化財保存活用地域計画の策定等があるが、現在炭鉄港関連市町で策定している自治体はない（検討中のところはある）。道内で本計画を策定した自治体等を見ると、計画策定が住民の地域の文化財に対する意識を高め、保存活用に関わる人が増えていったという好事例が多い。また独自に「〇〇遺産」という形で地域の歴史を物語る遺産を認定しているところもあり、こうした市町ごとの文化財保存活用への取組を検討していくことも重要である。

### ④ ふるさと納税、クラウドファンディング等の活用

より多くの人々から広い支援を受けて事業を継続していくためにふるさと納税、クラウドファンディング等を活用も検討していく。現在も赤平市、芦別市、岩見沢市などで炭鉄港をテーマにしたふるさと納税メニューを展開しているが（赤平市・芦別市：槐炭飴など炭鉱にまつわる商品の提供、他自治体との連携、岩見沢市：炭鉄港スペシャルガイドツアーへの参加権）、実施状況など情報共有しながらこうした取組を他の市町へも広げていく。

### ⑤ 道外関連地域・企業等との連携推進

炭鉄港のストーリーを語るうえで欠かせない鹿児島県（島津興業）、日本遺産で似たストーリーを持つ「播但貫く、銀の馬車道 鉱石の道（姫路市、福崎町、市川町、神河町、朝来市、養父市）」等との連携（相互の人的交流、それぞれの地域での情報発信等）を行ってきているが、それらの地域・企業等との連携をさらに強化していくとともに、企業版ふるさと納税なども視野に炭鉄港とゆかりのある地域（例えば札幌市、長崎県など）・企業等の関わりを積極的に作っていく。

(7) 地域活性化のために行う事業

(7) - 1 組織整備

(事業番号 1 - A)

事業名	事業運営体制の整備		
概要	計画の円滑な実施に向け、関係者間の連携と全体の方向性の調整を継続的に行うほか、加盟団体増に向けた声掛け等を進めていく。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	炭鉄港推進協議会の運営	構成 15 市町のほか、NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団、NPO 法人歴史的な地域資産研究機構等の市民団体、北海道中央バス（株）等事業者、北海学園大学等研究機関計 70 団体を構成員とする日本遺産炭鉄港推進協議会を運営する。	炭鉄港推進協議会（以下「協議会」）
②	各地域の事業者との連携	構成自治体が地域事業者との連携を強化し、それぞれの取組効果を高める。	構成自治体
③	炭鉄港推進協議会への加入促進	炭鉄港のストーリーに関係のある企業や地域関係者等への声掛けを進め、炭鉄港協議会の加入団体増を目指す	協議会
④	「炭鉄港サポーター」制度の検討	炭鉄港の取組を応援してくれる一般市民、企業等を募る「炭鉄港サポーター」制度の創設を検討する。年会費を設定し、サポーターにはきめ細やかな情報発信を行うほか、特典を設け、より実践的に炭鉄港に関わる機会を創出していく。	協議会
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	炭鉄港推進協議会総会・幹事会の開催数		2 回
2023			3 回
2024			2 回
2025	同上		各 2 回（計 4 回）
2026	同上		各 2 回（計 4 回）
2027	同上		各 2 回（計 4 回）
事業費	2025 年：200 千円、2026 年：200 千円、2027 年：200 千円		
継続に向けた事業設計	より効果的に事業を推進していくため、構成自治体の首長を含め、加盟団体の代表者が目標や活動計画の内容を共有できるようにする。		

(7) - 2 戦略立案

(事業番号2-A)

事業名	地域活性化計画推進事業		
概要	地域活性化に向けた各地での取組について推進力を持って進めるための体制を整備し、これまで以上に関係者間の連携を密にしながら全体としての取組の質を高めていく。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	「炭鉄港ラウンドテーブル」の設置	長年取組を進めてきた関係団体・企業、学識経験者、観光（旅行事業者、ガイド等）や教育（教員等）に関する専門家、地域住民、学芸員・研究者、行政担当者（観光関連、学芸員など文化財関連）などからなる「炭鉄港ラウンドテーブル」を協議会内に設置し、観光や教育に関する取組の質的向上、地域間連携（他の炭鉄港地域のPR・物産販売、地域を跨いだツアーの実施、等）等を進め、より強固に構成市町や市民団体等の取組を継続的・具体的に支えていく。	協議会
②	炭鉄港ラウンドテーブルミーティングの開催	年に数回関係者が集まり、より効果的な各地域での事業実施に向けたフラットな情報共有、アイデア共有等を行えるミーティングの場を設置する。	協議会
③	勉強会・ワークショップの開催	炭鉄港に関連する地域や他の日本遺産からゲストスピーカーを招いた勉強会を開催する。関係者間の連携も深め、より質の高い事業立案・実施につなげていく。	協議会
④	専門家派遣等	炭鉄港構成市町における住民向け講座や炭鉄港を活かした事業を検討している企業・団体・学校等にラウンドテーブルメンバーを派遣する。	協議会
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	炭鉄港ラウンドテーブル・勉強会・専門家派遣等の実施回数		-
2023			-
2024			-
2025	同上		2回
2026	同上		3回
2027	同上		4回
事業費	2025年：1,000千円、2026年：1,000千円、2027年：1,000千円		
継続に向けた事業設計	これまでの取組と課題をふまえ、新たに炭鉄港ラウンドテーブルを設置し、関連地域間の情報・アイデア共有等を推進することで、各地域での取組の活性化を目指す		

(7) - 3 人材育成

(事業番号3-A)

事業名	日本遺産を活用する人材の育成・連携支援		
概要	炭鉄港ガイド、プロデューサー等ストーリーを活かした観光ツアー、地域での体験プログラム実施に関わる“担い手”としての人材を増やしていく。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	炭鉄港ガイドの育成	「炭鉄港ガイド」の育成をさらに進める。また、一方的なガイドだけではなくインタープリテーションの技術支援としてワークショップ等も開催、炭鉄港ガイドの技術向上につなげる。	協議会
②	炭鉄港プロデューサーの育成	協議会加盟団体をはじめとし、各地域で活動している団体等の中から、地域の取組推進のエンジンの役割を担う「炭鉄港プロデューサー」を育成する。	協議会
③	『活かす炭鉄港』まちづくり講座の開催	他に類を見ない急激な人口減少と様々な社会問題が起きている地域において自らが考え行動し地域の枠組みを超えた「共に事にあたる」担い手を育成する。	協議会、市民団体
④	「炭鉄港インターンシップ」の実施	大学と連携し、炭鉄港の各地域で活動を行う団体や企業等へのインターンシップを実施、炭鉄港を活用した地域づくりの次世代の担い手増につなげる。	協議会、民間企業
⑤	ガイド団体・活動団体合同説明会	R2年度から運用している「炭鉄港ガイド名簿」には150名以上の登録者がいる。これらの登録者が実際にガイドやボランティアとして活躍できるよう、地域の団体と繋げるための合同説明会を開催する。	協議会
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	炭鉄港インターンシップ受入人数		-
2023			-
2024			-
2025	同上		5人
2026	同上		10人
2027	同上		15人
事業費	2025年：2,500千円、2026年：2,500千円、2027年：2,500千円		
継続に向けた事業設計	持続可能な地域活性化に向けた取組の「担い手」となるガイド、プロデューサー他、新たに関わる人材発掘は重要であるため、ラウンドテーブル等でより効果的な実施に向けた意見交換等を行う。		

(7) - 4 整備

(事業番号4-A)

事業名	ストーリーを体験するための環境整備、サブストーリーの発掘・活用
概要	炭鉄港ストーリーの体験に必要な案内板等の整備、新たなゲートウェイとなる拠点での情報発信、また、炭鉄港をより深く知る・楽しむための各地域でのサブストーリー発掘・活用等を行う。

	取組名	取組内容	実施主体
①	構成文化財・各地域のゲートウェイとなる拠点施設での案内・解説等の充実	構成文化財や拠点施設(ゲートウェイ施設)での案内板設置等が進められてきているが、未設置の箇所への設置他、すでにゲートウェイとして機能している博物館や道の駅などの施設で炭鉄港の解説を充実させることで「入口」としての機能を強化する。	構成市町 協議会 民間企業
②	新たなゲートウェイとなる施設等での情報発信	構成市町以外での新たなゲートウェイとして、札幌市内(北海道庁赤れんが庁舎、旧永山武四郎邸など)での情報発信を進め、炭鉄港各地域への誘客を進める。	協議会 各施設管理者
③	VR等デジタル技術を活用した構成文化財の記録・発信	非公開施設等のVRコンテンツの整備を進め、観光ツアー、体験プログラム等へ活用する。	構成市町 協議会
④	インバウンド対応	さらなるインバウンド向けの体験観光の環境整備のため各施設等での外国語版コンテンツ制作を進める。	構成市町 協議会
⑤	サブストーリーの発掘・活用	ラウンドテーブルメンバー、各地の学芸員らを中心に各地域のサブストーリーを発掘・整理し、観光ツアーやまち歩きプログラムの実施、ストーリーを活かしたグッズ開発等の場面で活用していく。	構成市町 協議会

年度	事業評価指標	実績値・目標値
2022	公開活用されている(入場や見学等ができる)構成文化財の割合	81%
2023		81%
2024		81%
2025	同上	83%
2026	同上	85%
2027	同上	85%

事業費	2025年: 2,500千円、2026年: 2,500千円、2027年: 2,500千円
継続に向けた事業設計	補助金・助成金を活用する他、構成市町、協議会構成団体や民間企業等の協力を得て事業を継続する。

(7) - 5 観光事業化

(事業番号5-A)

事業名	炭鉄港のストーリー・サブストーリーを体験できる商品の造成・販売		
概要	昨今のアドベンチャートラベル、サステナブルツーリズム等のトレンドも踏まえたより体験や学びの質が高いプログラムを展開していくことで炭鉄港を活かした観光事業を拡大していく。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	「炭鉄港プレミアムツアー」の実施	普段見ることや入ることが出来ない施設の一斉特別公開、かつて実際に炭鉱等で働いていた「語り部」によるガイドなど、より体験や学びの質が高い炭鉄港プレミアムツアーを実施する。	構成市町 協議会 旅行会社 市民団体
②	体験・まち歩きプログラムの充実	新たなガイド養成等を通じて、各地域で行われている体験・まち歩きプログラム等を例えば地域の食・自転車・企業見学・物販等を組合せ、より地域への波及効果の高いものへとブラッシュアップしていく。参加費収入を文化財保全に充てる仕組みを構築し、文化財所有者と協力して活用と保全の好循環を生み出す。	構成市町 協議会 旅行会社 市民団体
③	炭鉄港教育旅行・企業研修等の促進	炭鉄港はその地質的成り立ちから近代北海道の成立、国策による地域の盛衰、現在のまちづくりなど教育旅行や企業研修等を実地で行う非常に有効なコンテンツが充実している。すでに取組が進んでいる地域もあるが、市町の境を越えて連携し、全体に取組を広げていく。	構成市町 協議会 旅行会社 市民団体
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	協議会構成市町における観光入込客数		10,530千人
2023			14,565千人
2024			集計中
2025	同上		15,632千人
2026	同上		16,195千人
2027	同上		16,778千人
事業費	2025年：2,000千円、2026年：2,000千円、2027年：2,000千円		
継続に向けた事業設計	炭鉄港のストーリー・サブストーリーの活用やガイドの充実、また、道外への情報発信等もさらに積極的に行い道外からの集客も強化、全体としての観光客増につなげる。また、参加費収入の一部を文化財の保存に充てる仕組みの構築についても検討し、活用と保存の好循環につなげていく。		

(7) - 6 普及啓発

(事業番号6-A)

事業名	炭鉄港を活かした教育・普及啓発		
概要	地域住民、とくに子どもたちが、炭鉄港のストーリーを理解し地域に誇りを持てるよう教育現場等と連携し、より実践的な日本遺産に触れる機会の提供を進めていく		
	取組名	取組内容	実施主体
①	より実践的な教育プログラム・コンテンツの充実	現在、関係市町村の学校向け教材に炭鉄港に関する記述や授業で取り上げられる機会などは増えてきているが、座学にとどまらず、現地見学等を含めてさらに地域の子どもたちがより深く炭鉄港・地域の歴史を学ぶことができる教育プログラムを、例えばラウンドテーブルメンバーが講師をつとめる教員向けのワークショップ等の実施を通じて実践・拡充させていく他、より学びを深めるために必要な教材等の開発（副読本の改訂等）等を行う。	構成市町 協議会 学校等
②	炭鉄港出前講座の実施	ラウンドテーブルメンバー等による学生や地域住民向けの出前講座・講演会等を実施し、各地域での炭鉄港の理解促進につとめる。	構成市町 協議会 学校等
③	日本遺産フェスティバルをはじめとした各イベントでのPR	様々な地域遺産関連イベント等の機会を通じて、普及啓発・グッズ販売等を進めていく。	構成市町 協議会
④	文化財を活用したアートプロジェクト	R6年度に開催した「炭鉄港アートプロジェクト」を継続し、若者など新たなファン層へのアプローチや担い手との繋がりを生み出すとともに、アートを通じてまちのストーリーを伝える。	協議会 市民 民間企業
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	地域の文化に誇りを感じる住民の割合		91%
2023			93%
2024			92%
2025	同上		95%
2026	同上		95%
2027	同上		95%
事業費	2025年：1,500千円、2026年：1,500千円、2027年：1,500千円		
継続に向けた事業設計	地域の教育関係者、学芸員、事業者等との連携を進め、より効果的な実施方法を探る。アートプロジェクト等の一部事業においては、市民のボランティアや地元企業からの協賛なども得ながら地域の行事として継続していく。		

(7) - 7 情報編集・発信

(事業番号7-A)

事業名	より「伝わる」炭鉄港の情報発信
概要	炭鉄港に関心を持つ層を広げていくため、一方的に情報を伝えるだけではなく、よりストーリー・サブストーリーや構成文化財の情報、炭鉄港を知る・訪ねる・楽しむために必要な情報がわかりやすく見た人に「伝わる」情報発信を進めるため、既存の発信方法の改善を続ける。

	取組名	取組内容	実施主体
①	ポータルサイトの継続的な更新、充実	炭鉄港ポータルサイトでは、現在、ストーリーや構成文化財の紹介、モデルルート等を掲載している他、動的コンテンツとして構成市町等によるイベント情報等を発信しているが、ラウンドテーブル等での議論をふまえ、コンテンツの充実、よりわかりやすい情報発信等を行えるよう見直し等を適宜進める。また、より情報のゲートウェイとしての機能を充実させるための改修を検討する。	協議会
②	SNS を活用した情報発信	ポータルサイトでの情報発信と連動する形でよりタイムリーかつ担い手の顔が見えるような親しみの持てる情報発信を行い、各地域への誘客につなげる。	構成市町 協議会 市民団体等
③	マスメディアを活用した情報発信	テレビ、ラジオ、雑誌等の活用、また、企業等との連携により、日本遺産のストーリーや構成文化財を紹介することにより、地域外からの誘客促進・認知度向上を図る。	協議会

年度	事業評価指標	実績値・目標値
2022	ポータルサイトのアクセス数 (PV) ※前年比 10%増	109,885
2023		216,162
2024		243,545 ※2月末まで
2025	同上	267,899
2026	同上	294,689
2027	同上	324,158

事業費	2025年：2,000千円、2026年：2,000千円、2027年：2,000千円
継続に向けた事業設計	専門家のアドバイスをもらいながら、より効果的な活用方を模索していく。ポータルサイトの改修については文化財を活用した観光コンテンツ等の充実につなげることを前提に、補助金・助成金の活用を検討する。